

宋學의 國際的 背景

日本東洋文庫・長
榎 一 雄

(一)

宋史は宋代の儒學者を儒林・道學の二種に分類し、字句の解釋や本文の校定を主とした者を儒林傳に、儒學の哲學的倫理的體系の確立に努めた者を道學傳に列した。後者が所謂宋學即ち Neo-Confucianism と呼ばれているものであるがそれが Neo-Confucianism と言はれるのはその體系がそれ以前の儒學には見られない新しいものであったからである。

宋史の道學傳の序にこのことを指摘して次のように記している。

文王・周公既没、孔子有德無位、既不能使是道之用漸被斯世、退而與其徒定礼樂、明憲章、刪詩、修春秋、讀易象、討論墳典、期使五倫・常三綱聖人之道昭明於無窮、故曰、夫子賢於堯舜遠矣、孔子没、曾子獨得其傳、傳之子思、以及孟子、孟子没而無傳、兩漢而下儒者之論大道、察焉而弗精語焉、而弗詳、異端邪說起而乘之、幾主大壞、千有餘載、孟宋中葉、周敦頤出於舂陵、乃得聖賢不傳之學、作太極圖說、通書、推明陰陽五行之理、命於天而性於人者、瞭若指掌、張載作西銘、又極言理一分殊之旨、然後道之大原出於天者灼然而無疑焉、

これによれば所謂道學は孟子以來一千年以上絶えていた堯舜文王周公の道を復活し、その道が天に源を發していることを明かにしたものであると言ふのである。

道學傳はこれに續けて、程顥・程頤を経て朱熹に至って道學の體系が大成されたことを述べ、次のように記している。

迄宋南渡、新安朱熹得程氏正傳、其學加親切焉、大抵以格物致知焉先、明善誠身爲要、凡詩書六藝之文與夫孔孟之遺言、顥錯於秦火、支離於漢儒、幽沉於魏晉六朝者、至是皆煥然而大明、秋然而各得其所、此宋儒之學所以度越諸子而上接孟氏者歟、

しかし道學傳はそれでは何故にこうした新學問が宋代に至って突如として勃興したのかについては、詳しく説明していない。唯々 それに佛教或いは道教の影響があったと考えられることを指摘して、程顥の傳では

自十五六時、與弟頤聞汝南周敦頤論學、遂厭科舉之習、慨然有求道之志、泛濫於諸家、出入於老釋者幾十年、返求諸六經而後得之、

と言い、張載の傳では

又訪諸釋老累年、究極其說、知無所得、反而求之六經、

と言っている。 佛教・道教を研究しても明かでなかったので、再び六經について研究して始めて道を明かにすることが出来たというのである。 そのことは同じ道學傳の朱熹の條にも、朱熹が孝宗即位の時（1162）に上った封事を掲げ、孝宗が文章詩作や老子釋氏の書に興味を有っている と非難し、それらが帝王學の根本ではなく、「格物致和、以極夫事物之變、使義理所存、纖悉畢照、則自然意誠心正而可以應天下之務」ことこそ最も必要であると述べたことを挙げていることから察せられる。 朱熹が佛教道教を意識的に排斥し

したのは却って彼がそれに影響されていたことを示すものであろう。

宋學が佛教及び道教の影響を受けて興ったという考え方は、多くの人々によって是認されている所である。佛教の中でも靜坐冥想によって眞理を探索しようとする禪宗の影響は特に大きいと言はれている。しかし道學傳に明記しているように、程顥や張載は佛教・道教の教説を多年熱心に研究したけれども、それによって眞理を發見することが出來ず、却って儒教の經典に歸って道を發見したというのであり、朱熹は佛教や道教では人間の意を誠にし心を正しくすることが出來ないと言っているのである。周敦頤・程顥・程頤と同時代（十一世紀）の人である蘇軾が佛教・道教の兩者を採用した儒學者であつたのに、所謂道學者とは別のグループに屬していたことは、道學が佛教・道教とは本質を異にするものである事實を示すものであろう。

（二）

一體、宋學とは如何なる學問であつたのであろうか。それは周敦頤（1017～1073）に始まり、朱熹（1130～1200）に至って整然たる體系を與えられたものである。宋學が朱子學とも呼ばれているのはそのためである。宋學の言う所によると、宇宙の萬物は氣と呼ばれる材料から出來ているが、森羅萬象にそれぞれの形が具っているのは、氣に動的狀態に在る部分（即ち陽）と靜的狀態にある部分（即ち陰）とがあり、兩部分の交互作用によって千差萬別の形が生まれてくるからである。そしてこのようにして氣に形を具えさせるのは理と名付けられる原理の働きによるというのである。この原理は個々の事物の原理であると同時に、宇宙全體の原理でもある。

理氣の二元を對立させるこの存在論は、宋學の大きな特色の一つであるが、これに併行するもう一つの特色が朱子によって發展させられた倫理學說である。朱子によれば、人間の本質即ち性は本來理そのもので絶対に靜なるべきもの（本然の性）であるが情欲によって攪亂されて動の状態に陥っている（氣質の性）のが常である。この氣質の性を變化して本然の性に返すこと、即ち人欲を去って天理に返すことが人間に與えられている課題である。それには敬に徹し、心から夾雜物を除くことに努め、格物致知即ち讀書を通じて學問に勵み、知識を擴めるべきである。理を具體的に示しているのは礼を始めとする三綱・五倫・五常等の規定であり秩序であるから、その實行遵守に努めるべきであるという。

存在論における理も 倫理說における理も同一のものであって、宋學にいう道はこの理に他ならない。この道を探求し、自分をこの道そのものにすることが、聖人に至る方法であり、學問の目的であるというのである。

ここで最も注意すべきことは、朱子が學問こそ理を明かにする唯一の方法であるとしている點である。これは朱子が主知主義・合理主義の立場に立っていたことを示すものに他ならない。

宋學は理氣の二元で物の存在を説明している。その限りにおいてそれは二元論と言える。しかし、理と氣とは次元を異にするものである。氣は材料であり、理は氣に或る状態を與えている作用である。この理こそ宇宙の萬物を貫いているもので、人が聖人となり得るのはこの理があるからであり、宋學の目標はこの理を現世に具現することに他ならない。理は道であり、天であり、無極にして太極という宇宙の根源の存在を可能にする原理なのである。

このように考えて來ると、宋學は要するに理・道・天・無極・太極に歸一することを目標としているもので、その哲學説と倫理學説とは思辯と實踐とのすべての意味を理との關連において説明したものと言ってよいであろう。言い換えると、それらの哲學や實踐道德が何故に存在し得るのか、或いは存在しなければならないのかを理の立場から説明しようとしたものと言えるであろう。

更に言えば、宋學は理から、即ち天から人間を含む萬物が出ているという考え方を出發點とし、理即ち天に歸ることを終極の目的とした哲學説であり、倫理學説であるとして謬ないであろう。

(三)

十一、十二世紀の支那に突如としてこうした新しい思想大系が生まれた事情について、いくつかの推測が行われている。一つは宋史の道學傳に見られるように佛教・道教の影響を考える説である。佛教に言う煩惱とそれを絶滅して涅槃(nirvana)或いは解脱(vimukti)の境地に入る考え方は、理・氣の考え方に相通ずるものがある。朱熹が人間の心から煩惱に當る欲を取除いて天の理そのものになるこの必要を説いているのも佛教のこの考え方に相應ずる。一つは朱熹の居住した福建の地方にマニ教徒が多かつたこと、マニ教が善惡・明暗等二元を對立させて考える宗教であつたことから、理と氣とを區別して考える思想にマニ教の影響を見ようとする説である。しかし理・氣が次元を異にする要素であつて、その併立を二元とは見られないことは、前に一言した通りである。假に二元であるとしても、陰陽を對立させる考え方は、遅くとも戰國時代から存在する。支那固有と

も言うべき古い考え方であるので、南宋の時代に更めてマニ教から伝えられたとする必要はない。 更にもう一つは回教の影響によるものとして、コーランその他回教関係の書物から宋學者の説に似た記事を抽出している説である。 國粹主義者として名高い章炳麟（1869～1936）がこの説をその國故概論に書いていると言われ、その後陳子怡氏は「宋人理學由回教蛻化而出」（師大月刊、第六期、一九三三年九月、一一八～一三八頁）を書いて周敦頤の無極・太極・人極という考え方が回教の眞一（眞主）・數一（道之大原）・體一（心靈之一貫）を改頭換面したものであるとしている。（章氏の説は陳氏の引くところによる。）

こうした外來宗教の影響によるという説のほか、唐の韓愈（768-824）の原道・原性が宋學の源流をなすと論ずる人もある。

（四）

私は以前から宋學は回教哲學の影響を受けて興ったのではあるまいかと考えていた。 しかし、宋學にも回教哲學にも知識がないのでその推測が當っているか否か、今日でも判らない。 たまたまこの會議に招かれたので、その考えの概略を述べて専門家の批判を仰ぎたい。

宋學の興った十一、十二世紀とその前後の中央アジアには、その西部（Khurasan及びTransoxiana）にサーマーン王朝（The Sāmānids, 819-1005）、ホラズム地方にフワラズム＝シャー（The Khwārazm-Shāhs, 917-995, C.1077-1231）、アフガニスタン・西北インドにガズナ王朝（The Ghaznavids, 997-1186）、トランスオクシアナ・東

トルキスタンにかけてカラハン王朝 (The Qarakhanids, 992-1211) の諸王朝が存在した。

この中最も富強で回教文化の中心として榮えたのは、イラン人系のサーマーン王朝で、東は天山山脈の北のタラス (Talas)、西はカスピ海南岸のマザーンデラン (Māzānderan)、西南はアフガニスタン・イラン國境のシースターン (Sistān)、北はシル河流域地方をその勢力下に收め、東西貿易特にトルコ系民族を賣買する奴隸貿易で巨利を博し、多くの學者・藝術家を出した。その中の地理學者等の書いた地理書、旅行記の中には支那に関する記述が多く見えていて、この國に支那についての知識が多く齎らされていたことが判るが、これはこの國の商人の中に支那に赴くものが少くなかったことを示すものである。

殊に著しいのはサーマーン王朝の商人や僧侶による近隣諸民族への回教の布教であって、中央アジアのトルコ系民族の回教化、殊に東トルキスタンへの回教の流入はその結果である。支那にもこの新しい回教宣傳の波が押し案せて來たことであろう。

サーマーン朝を中心とする中央アジアの回教世界には二つの大きな潮流があった。一つはスーフィズム (Sufism) と呼ばれている宗派による教えである。スーフは羊毛を意味するアラビア語で、羊毛で織った衣服を着ていた職人の階級がこの教を説いたことに始まるのであると言われる。この宗派は神への絶対の歸依を説くもので、九世紀アル=キンディ (Al-Kindi, C. 800-879) によって組織されたというが、十世紀に入ると新しい宗派強化運動が興り、諸方にその團結の中心が出來た。サーマーン朝の首都ブハラはその中でも重要な中心であった。これに對立するもう一つの潮流は遠くアリストテレスの學統を繼ぐ主知主義或いは合理主義の主張である。こ

れは知識こそ最も重要なものであるとし、知性・理性を最高の認識の源泉と看做す立場である。こうした考え方が回教世界に入ったのも古いことで、右のスーフィズムは實はこうしたアリストテレスの學派に反對するために組織せられた宗派であつた。サーマーン朝の末期に出たイブン＝シーナー（Ibn Sīnā or Avicenna, 980-1037）はブハラの附近に生まれた人でこの合理主義の主張の代表者であつた。彼の著書は回教世界に廣く讀まれたばかりでなく、歐洲にも行きわたり、中世の哲學界に大きな影響を興えた。

スーフィズムの主張と合理主義の立場とを融合させようと努力したのはアル＝ガザーリー（Al-Ghāzālī, 1059-1111）で、合理主義を認めないものは愚者であり、スーフィズムを排斥するものは迷者であるとした。この人が活躍したのはセルヂューク王朝治下のバグダッドである。

十一、十二世紀とその前後ブハラを中心に發達した、二つの相對立する回教の考え方スーフィズムと合理主義とが、果してどの程度までその周邊の地域に擴められ、理解されたか。私はそれを十分確める材料を有たない。しかし、「無極にして太極」なる實在の根源を理とする宋學の考え方、更にその理の追究は「格物致知」即ち知識によつてのみ可能であるとする宋學の立場は、同じ頃回教世界で行われていた二つの眞理追究の立場と酷似するものである。しかしそれが支那と貿易を行い、支那に關する知見を有つた、中央アジアのサーマーン朝で特に活潑に展開されていた知的運動であることを考えると、兩者の間に密接な結びつきがあることを考えざるを得ない。

西方キリスト教の世界ではトマス＝アクィナス（Thomas Aquinas, 1225-1274）が出て信仰と理性との調和を説いた。これらを併せ考えると、宋學も理性を眞理發見の道としようとする世界的潮流の一つであつたとすべきである。